

# 森谷延雄の家具

「支那にある朱塗の家具を思い浮かべながら、それに金と象牙色の蒔絵を引き合わせて、ただ其の家具を入れる為の室を造ろうという簡単な気持ちで、単にそれだけで設計を致したのです」 森谷延雄『小さき室内装飾』1926年

森谷延雄は1920（大正9）年に欧米に留学。イギリス、フランスなどで西洋の家具や模様を研究し、帰国後、東京高等工芸学校木材工芸科の助教授としてインテリアを教えていました。

no.29～31《朱の食堂》は1925（大正14）年の国民美術協会第11回展覧会で発表されたモデルルームの一つです。発表された家具は朱塗の盃台からヒントを得たとされますが、施されたハート、クローバーなどの模様や植物の装飾は西洋由来のもので、また、肘掛椅子は「軽い英国十八世紀初葉の田舎風の椅子を朱に塗って、どう東洋の気分が出るかとの好奇心」によって作られたとされ、留学中に培った欧米家具の知識が発揮されています。西洋と東洋の要素が優れたバランス感覚によって融合されていて、ロマンチックな雰囲気を作りだしています。

森谷は《朱の食堂》のように、自身の理想を具現化した作品を発表する一方、1926（大正15）年に「木のめ舎」という家具の団体を結成します。ここでは一般庶民のための実用的かつ美しい洋風家具の製作と普及が目標とされていました。

将来を期待されていた森谷でしたが、木のめ舎第1回展の開催前日に33才という若さでこの世を去りました。

今回展示されている3点は2008年に復原されたものです。復原にあたり、剣持デザイン研究所が森谷の残した図面や色指示、当時発表されたモデルルームを参考に綿密な調査をし、それを元に宮崎木材工業が制作を行いました。また色付けは東京藝術大学にて田村匡伸氏によってなされ、様々な技術によって当時の森谷のデザインを限りなく忠実に再現したものになっています。